

昭和二十八年四月七日 初版印刷
昭和二十八年四月十日 初版發行

昭和文學全集11
德田秋聲集

著者 德田秋聲

發行者 角川源義

印刷者 小田茂作

東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クロス 日本クロス工業株式會社
印刷所 東日本印刷株式會社
製本所 小高製本所

徳田秋聲集

昭和文學全集
角川書店版

目次

卷頭寫眞

筆蹟

縮圖

假裝人物

光を追うて

あらくれ

町の踊り場

秋聲俳句

解説

年譜

徳田一穂

セ

叁

二五

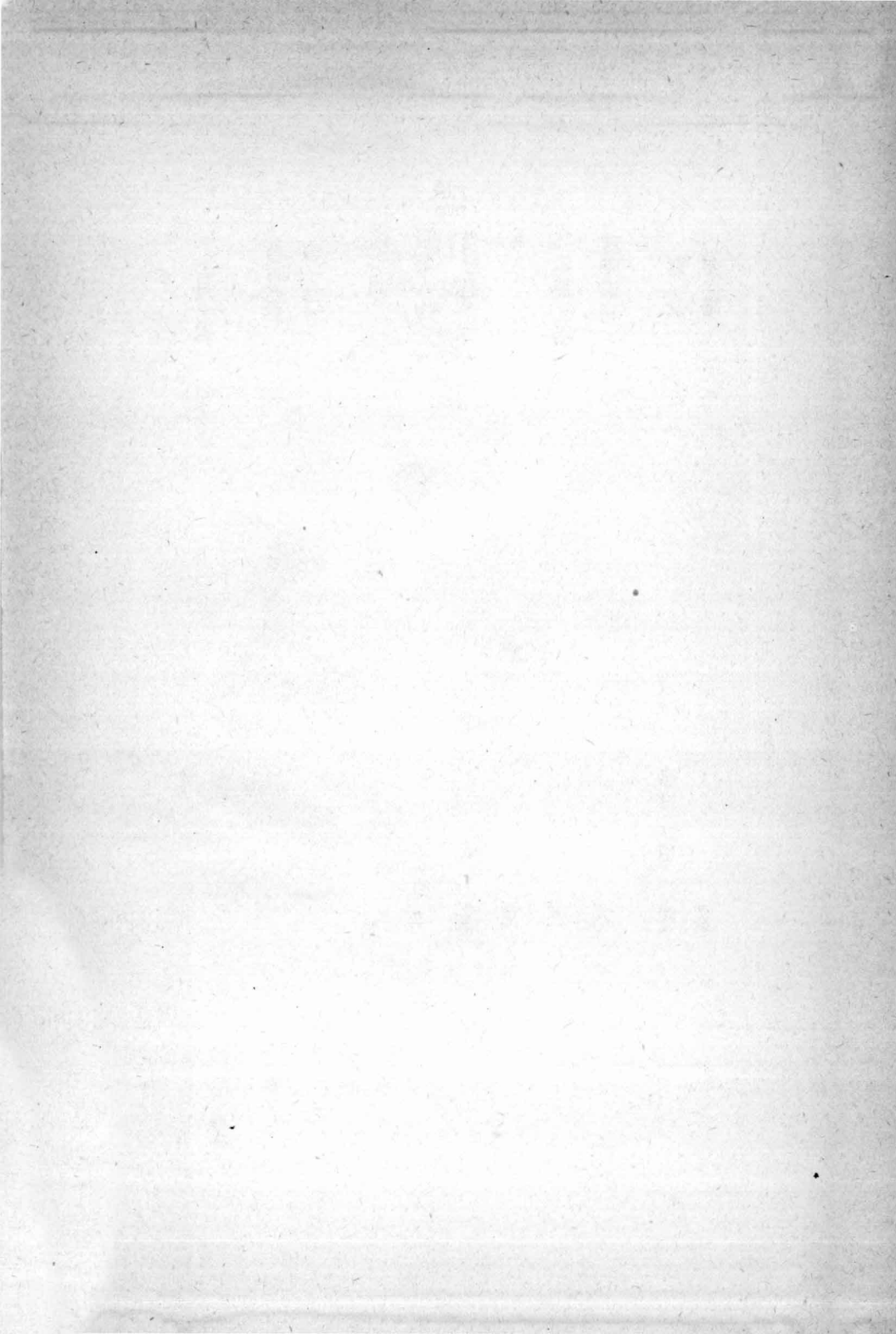
三二

三六

三七

三八

三九



徳田秋聲集

生
き
の
び
と

又
算
学
の

国
志
を
る

秋
風

縮圖

日蔭に居りて

一

晩飯時間の銀座の資生堂は、いつに變らず上も下も一杯であつた。

銀子と均平とは、暫く二階の片隅の長椅子で席の空くのを待つた後、やがてずつと奥の方の右側の窓際のところへ座席を取ることが出来、銀子の好みで此の食堂での少し上等の方の定食を注文した。均平が大衆的な淺草あたりの食堂へ入ることを覺えたのは、銀子と附合ひたての、もう大分古いことであつたが、それ以前にも彼がぐれ出した時分の、舞踏仲間につれられて、下町の盛り場にある横丁のおでん屋やとんかつ屋、小料理屋へ入つて、夜更まで飲み食ひをした時代もあり、映画の歸りに銀子に誘はれて入口に見本の出てるやうな食堂へ入るのを、さう不愉快にも感じなくなつてゐた。反つて大衆の匂ひをかくことに興味をすら覺えるのであつた。それは一つは養家へ對する反感から來てゐるのもあり、自身の生活の破綻を諦め忘れようとする

意氣地なきの意地とでも言ふべきものであつた。

しかし今は長いあひだ恵まれなかつた銀子の生活にも少しは餘裕が出来、いくらか物とするやうな日々を送ることが出来るので、いつとはなし均平を誘つての映画館の歸りにも、いくらかの贅澤が許されるやうになり、喰ひしん坊の彼の時々の食慾を充たすことくらゐは出来るのであつた。勿論食通といふ程料理の趣味に耽るやうな柄でもなかつたが、均平自身は經濟的にも成るべく合理的な選擇はする方であつた。戦争も足かけ五年つゞき物資も無くなつてゐるには違ひないが、生活の何の面でも公定價格にまで總ての粗惡な品物が吊りあげられ、商品に信用のおけない時代であり、景氣のいゝに委せて、無責任をする店も少くないやうに思はれたが、一方購買力の旺盛なことは疑ふ餘地もなかつた。

パンやスープが運ばれたところで、今まで煙草をふかしながら、外ばかり見てゐた均平は、吸差を灰皿の縁におき、パタを取り分けた。五月の末だつたが、その日はひどく冷氣で、空氣がじとじとしてをり、鼻や氣管の悪い彼はいつもの癖でつい嚏をしたり、ナプキンの紙で水漬をふいたりしながら、パンを喰つてゐた。

「ひよつとすると今年は凶作でなければいゝがね。」

素朴で單純な性格を、今以て失はない銀子

は、取越苦勞などしたことは、曾てないやうに見えた。幼少の時分から、相當生活に處けられて來た不幸な女性の一人でありながら、何うかするとお天氣が遽にわるくなり氣分がひどく鬱しくなることはあつても、陰氣になつたり鬱ぎ込んだりするやうなことは、絶對になかつた。苦勞性の均平は、どんな氣分のくさ／＼する時でも、そこに明るい氣持の持た方を發見するのであつた。彼女にも暗い面が全然ないとは言へなかつたが、過去を後悔したり現在を嘆いたりしなかつた。毎日の新聞は能く讀むが、均平が事件の成行を案じ、一應現實を否定しないではゐられないのに反し、動もすると統制で蒙りがちな商賣の遣りにくさを、こぼすやうなこともなかつた。「幕末には二年も續いてひどい飢饉があつたんだぜ。六月に拾を著るといふ冷氣でね。」返辭のしやうもないので、銀子は黙つてパンを食べてゐた。

次の皿の來る間、窓の下を眺めてゐた均平は、ふと三臺の人力車が、一臺の自動車と並んで、今人足の目間苦しい銀座の大通りを突切らうとして、しばし此の通りの出端に立往生してゐるのが目についた。そしてそれが行きすぎる間もなく、又他の一臺が威勢よくやつて來て、大通りを突切つて行つた。

二

勿論車は二臺や三臺に止まらなかつた。レ

ストウランの食事時間と同じに、ちやうど五時が商賣の許された時間なので、六時に近い今が恰も潮時でもあるらしく、ちよつと間を置いては三臺五臺と駈出して来る車は、看々何十臺とも知れぬ數に上り、動もすると先が聞へるほど後から押寄せて来るのであつた。それは殊に今日初めて見る風景でもなかつたが、食事前後にわたつて可なり長い時間のことなので、ナイフを使ひながら窓から見下してゐる均平の目に、時節柄異様の感じを與へたのも無理はなかつた。

こは恐らく明治時代における文明開化の發祥地で、又その中心地帯であつたらしく、均平の少年期には、既に道路に煉瓦鋪裝が出来てをり、馬車がレールの上を走つてゐた。殆ど總ての新聞社はこの界限に陣取つて自由民權の論陣を張り、洋品店洋服屋洋食屋洋菓子屋といふやうなものも此處が先驅であつたらしく、この食堂も化粧品が本業で、わづかに店の餘地で綿服に響かけのボイが曹達水の給仕をしてをり、手狭な風月の二階では、同じ打扮の男給仕が、フランス風の料理を食ひに来る會社員達にサブビスしてゐた。尾張町の角に、ライオンと云ふカフェが出来、七人組の美人を給仕女に備つて、慶應ギョイの金持の子息や華族の若様などを相手にしてゐたのもさう遠いことではなかつた。その頃になると、電車も敷けて各區からの距離も短縮され、草薙々たる丸の内の原つばが、

立ち上りて煉瓦造りのビル街と變り、日露戦争後の急速な資本主義の發展と共に、歐風文明も漸くこの都會の面貌を一新しようとしてゐた。銀座には旨い珈琲や菓子を食べさす家が出來、勸工場の上上に尖端的なキャヴァレイが出現したりした。やがてデパートメントストアが各區域の商店街を寂れさせ、享樂機關が次第に膨脹するこの大都會の大衆を吸引することになるであらう。

この裏通りに集喰つてゐる花柳界も、時代の波を被つて、或る時は彼等の洗煉された風俗や日本髪が、世界戦以後のモダニズムの横溢につれて壓倒的に流行しはじめた洋装やパーマネントに押されて、晝間の銀座では、時代錯誤の可笑しさ身すばらしさをさへ感じさせたこともあつたが、明治時代の政權と金權と共に、榮々と育まれて來たさすが時代の寵兒であつただけに、その存在は根強いものであり、或る時は富士や櫻や歌舞伎などと共に日本の矜りとして、異國人にまで讚美されたほどなので、今日日本趣味の勃興の蔭、時局的な統制の下に、軍需景氣の廻りを受けつつ、上層階級の宴席に持込まれ、たとひ一時的にもあれ、曾ての勢ひを盛返して來たのも、この國情と社會組織と何か抜き差しならぬ因縁關係があるからだとも思へるのであつた。

「今夜はとんぱあたりで、大宴會があるらしいね。」

均平は珈琲を掻きまはしながら私語いた。生來ぶつ切ら棒の銀子は、別に返辭もしなかつたが、彼女は彼女でそんな事よりも、もつと細かいところへ目を注いでゐて、車のなかに反りかへつてゐる女達の服裝について、その地や色彩や柄のことばかり氣にしてゐた。それといふのも彼女も亦場末とはいひながら、一かどの藝者の抱へ主として、自身はお化粧嫌ひの、身装などに一向頓著しないながらに、抱への御座敷者には、相當金をかける方だからであつた。それも安くて割のいゝものを搜すとか、古いものを押くり返し染め返したり、仕立直したり、手数をかけるだけの細かい頭腦を働かすことはしないで、總て大雑把にてきぱき捌いて行く方で、大抵は呉服屋まかせであつたが、商賣人の服裝には注意を怠らなかつた。

「この花柳界は出先が遠くて、地理的に不利益だね。」

均平は呟きながら、いつか黄昏の色の迫つて來る街をぼんやり見てゐた。

三

均平は、こんな知名の華やかな食堂へなぞ入る度に、今ではちよつと照れ氣味であつた。今から十年餘も前の四十前後には、一時期れてゐた時代もあつて、ネオンの光を求めて、其頃全盛を極めてゐたカフェへ入り浸つたこともあり、本來さう好きでもない酒を啜

つて、連中と一緒に京濱國道をドライブして、本牧あたりまで踊りに行つたこともあつたが、その頃には船會社で資産を作つた養家から貰つた株券なども多少残つてゐて、可なり派手に札びらを切ることも出来たのだが、今は悉皆境遇がかはつてゐた。今から回想してみると其頃の世界はまるで夢のやうであつた。これといふ生産力もなく、自暴氣味でぐれ出したのが段々嵩して、本來の自己を見失つてしまひ、一度軌道をはづれると、抑制も利がなくなつて、夢中で遊びに耽つてゐたので、酒の醒めぎはなどには、何か冷たいものがひやりと背筋を走り、昔の同窓の噂などを耳にすると、體が疼くやうな感じで飲んだり遊んだりする。殊に雨のふる夜更などに養家において来た二人の子供のことを憶ひ出すと、刑で鞭打たれたやうに心が痛み、氣弱くも枕に涙することも屢々であつた。しかし殆ど酷薄ともいへる養家の仕打に對する激情が彼の溫和な性質を、そこへ驕り立てた。

今は既にその惡夢からもさめてゐたが、醒めた頃には金も餘すところ幾許もなかつた。それでも氣紛れな株さへやらなかつたら、新婚當時養家で建てゝくれた邸宅まで人手に渡るやうなことにならなかつたかも知れなかつた。

その頃には世の中もかはつてゐた。放漫な財政の破綻もあつて、財界に恐慌が襲ひ來

り、時の政治家によつて財政緊縮が叫ばれ、國防費がひどく切り詰められた。均平も學校を卒業すると直ぐ、地方廳に官職をもつたこともあるので、政治には人並みに興味があり、議會や言論界の動靜に、それとなく注意を拂つたものだつたが、彼自身の生活がそれ處ではなかつた。それに官界への振出しに、地方廳で政黨色の濃厚な上官と、選舉取締りのことなどで衝突して、即日辭表を叩きつけてからは、官吏がふつふつ厭になり、一時新聞の政治部に入つて見たこともあつたが、それも客氣の多い彼には、人事の交渉が煩はしく、直きに罷めてしまひ、先輩の勧めと斡旋で、三村の妹の婿が取締りをしてゐる紙の會社へ勤めた。そこがしつくり拵つてゐると思へないのであつたが、田舎に残つてゐる老母が、どこでも尻のおちつかない、物に飽き易い彼の性質を苦にして漢學者の父の詩文のお弟子であつた其の先輩に頼んで、それとなし彼を戒めたので、均平も少し恥かしくなり、意地にもそこで辛抱しようと思ひしたのであつた。そしてそれが三村家の三女と結婚する因縁ともなり、三村家の別家の養子となる機縁ともなつたのであつた。

しかし均平に取つて、三村家のさうした複雑な環境に身をおくことは、決して心から楽しいことでも、有りたい事でもなかつた。祖父以來儒者の家であつた彼の家庭には、何か時代とそぐはぬ因縁に囚はれがちな氣分も

あると同時に、儒教が孤獨的な道德教の多いところから、保身的な獨善主義に陥り易く、さういふ處から醸された雰圍氣は、均平には遣切れないものであつた。それが少年期から壯年期へかけての、明治中葉期の進歩的な時代の風潮に目ざめた均平に、何かしら叛逆的な傾向をその性格に植ゑつけ、育つた環境と運命から脱け出ようとする反撥心を唆らずにはおかなかつた。それゆゑ學窓を出て官界に入り、身邊の世のなかの現實に觸れた時、勝手がまるで違つたやうに、上官や同僚が總て虚偽と詭譎の便宜主義者のやうに見えて仕方がなかつた。しかしそつち此方轉々して見て、前後左右を見廻した果に、いくらか人生がわかつて來た。人間の社會的に生きて行くべき方法も領けるやうな氣がして、持前の主角が除れ、遽に足元に氣を配るやうになり、養子といふ條件で三村の令嬢と結婚もしたのであつたが、内面的な悲劇もまた其處から發生しずにはゐなかつた。

こゝでは酒が飲めないもので、均平は何か間のぬけた感じだつたが、近頃はさう物に拘泥はらず、總てを貴方まかせといふ風にしてゐればゐられないこともないので、酒の拂底な今の時代でも、格別不自由も感じなかつた。勿論心臓も少し悪くしてゐた。かうした日蔭者の氣樂さに馴れてしまふと、今更何をしよ

うといふ野心もなく、それかと言つて自分の愚かさを自嘲するほどの感情の熾烈さもなく、女子供を相手にして一日一日と生命を刻んでゐるのであつた。時にははつと生命を刻み込んでゐるのであつた。いつそ満洲へでも飛び出してみようかと考へることもあつたが、あの邊にも同窓の偉いのが重要ポストに納まつてゐたりして、何をすることも方難が解らず、自信を持てず、卒々となると才能の乏しさに怯けるのであつた。四十過ぎての蹉跎を挽回することは、事實さう容易いことでもなかつたし、雙鬢に白いものがちか／＼する此の年になつては、何處へ行つても使つてくれ手はなかつた。

二人が席を立つと、後連がもう遣つて來て、傍へ寄つて來たが、それは中産階級らしい一組の母と娘で、健康其物のやうな逞しい肉體をもつた十六七の娘は、無造作な洋装で、買物のボール箱をもつてゐた。均平は彈けるやうな若さに目を見張り、笑顔で椅子を譲つたが、今夜に限らず銀座邊を歩いてゐる若い娘を見ると、加世子のことが思ひ出されて、暗い氣持になるのだつたが、同窓會の歸りらしい娘達が、嬉しうに派手な著物を著て、横町のしる粉屋などへぞろ／＼入つて行くのを見たりすると、その中に加世子があるやうな氣がして、わざと顔を背向けたりするのだつた。加世子が純白な乙女心に父を憎んでゐるといふことも解つてゐた。そして其が

又一方銀子に取つて、何となく好い氣持がしないので、彼女の前では加世子の話はしない事にしてゐた。その癖銀子は内心加世子を見たがつてはゐた。

「可いぢやないの。加世子さん何不足なく暮してゐるんだから。」

加世子の話をする、均平はいつも凹みされるのだつたが、それは均平の心を安める爲のやうでもあり、恵まれない娘時代を過した彼女の當然の癖みのやうであつた。

階段をおりると、明るい廣間の人達の樂しさうな顔が見え、均平は無意識にその中から知つた顔を物色するやうに、瞬間視線を配つたが、こゝも客種がかはつてゐて、何かしら屈托のなささうな時代の潑刺さがあつた。

「いかゞです、前線座見ませんか。」

映畫狂の銀子が追ひ纏るやうにして言つた。彼女は大抵朝の九時頃から、夜の十一時まで下の玄關わきの三疊に頭張つてゐて、時には「風と共に去りぬ」とか、「大地」、「キユーリ夫人」と言つた小説に讀み耽るのだつたが、デパート歩きも好きではなかつたし、芝居も高いばかりで、相もかはらぬ俳優の顔觸や出しもので、テンボの鈍いのに肩が凝るくらゐが落着きであり、乗りものも不便になつて歸りが億劫であつた。下町にゐた十五六時代から、映畫だけが一つの道樂で、著物や持物にも大した趣味がなかつた。均平も退屈凌ぎに一緒に日比谷や邦樂座、又大勝館あたりで

封切りを見るのが、月々の行事になつてしまつたが、見る後から後から筋や俳優を忘れてしまふのであつた。物によると見てゐて、筋の全然解らないものもあつて、彼女の解説が必要であつた。

「さあ、もう遅いだろ。」

「さうね、ちや早く歸つて風呂へ入りませう。」

銀子はでつくりした小軀だが、この二三年めき／＼肥つて、十五貫もあるもので、ぶらぶら歩くのは好きでなかつた。いつか奈良へ旅した時、歩きたくぶれて、道傍の青草原に、べつたり坐つてしまつたくらゐだつた。

銀子は途々車を掛合つてゐたが、やがて諦めて電車に乗ることにした。この系統の電車は均平にも既に久しくお馴染になつてをり、飽き／＼してゐた。

五

銀子の家は電車通から三四町も入つた處の片側町にあつたが、今では二人でちよいちよい出歩く均平の顔は、この邊でも相當見知られ、狭いこの世界の女達が、行きずりに挨拶したりすることも珍しくなかつたが、均平には大抵覺えがなく、當惑することもあつたが、初めほど厭ではなくなつた。それでも何か居候のやうな氣がして、これが自分の家といふ感じがしなかつた。銀子も商賣を始めない以前の一年ばかり、こゝからずつと奥の方

にあつた均平の家へ入りこんでゐたこともあつて、子供もゐただけに、もつと厭な思ひをしたのであつたが、均平も持ち切れな感しで、「私は何うすればいいか知ら」と苦しんでゐるのを見ながら、何うすることも出来なかつた。さう云ふ時に、自力で起ちあがる腹を決めるのが、夙から世間へ放り出されて苦しんで来た彼女の強味で、諦めもよかつたが、轉身にも敏捷であつた。今迄はこの世界から足を洗ひたいのが念願で、況してこの商賈の裏表をよく知つてゐるだけに、二度と後を振り返らない積りであつたが、一度この世界の雰圍氣に浸つた以上、そこで這ひあがるより外なかつた。

「さう氣を腐らしてばかりゐても仕方がないから、こゝで一つ思ひ切つて置き家を一軒出して見たら何うかね。」

母が云ふので銀子もその氣になり、幾許かの手持と母の騰繰とを纏めて株を買ひ、思つても見なかつた此の商賈に取りついたのでつた。銀子の氣象と働きぶりを知つてゐるものは、少し頭を下げて行きさへすれば、金はいくらでも融通してくれる人もあり、その中には出先の女中で、小金を溜めてゐるものもあり、このなかで金を廻して、安くない利子で腹を肥してゐるものもあつたが、動もすると弱いものいちめも爲兼ねないことも知つてゐるので、たとひ何んな屋臺骨でも、人に縋りたくはなかつた。兎も角當分目前で稼ぐこと

にして路地に一軒を借り、お袋や妹に手傳つてもらつて、披露目をした。案じる程のこともなく、皆なが聲援してくれた。

「あ、其の方がいいよ。」
見番の役員もさう言つて悦んでくれ、銀子も氣乗りがした。

「大體あんたは安本を出て、家をもつた時に始めるべきだつた。多分始める下工作だらうと思つてゐたら、何時の間にか彼處を引拂つてアパートへ移つたといふから、詰らないことをしたものだと思つてゐたよ。」

その役員がいふと、又一人が、
「それも可いが、子供のある處へ入つて行くなんて手はないよ。第一三村さんは屋敷まで擔保に入つてゐるていふぢやないか。」

銀子は好い氣持もしなかつたが、息詰るやうな一年を振りかへると、悪い夢に襲はれてゐたと思へず、二三年前に崩壊した四年間の無駄な結婚生活の失敗にも懲りず、兎角結婚が常住不斷の夢であつたために、同じ事を繰返した自分が、餘程莫迦なのか知ら、と思つた。

「子供さんなら可いと思つてゐただけけれど、矢張り難しいものなのね。」

別にさう商賈人じみた處もないので、銀子は加世子には懐かれもしたが、それが反つて傍の目に若い娘を冒瀆するやうに見えるらしかつた。均平の亡くなつた妻の姉が、誰よりも銀子に苦手であり、それが様子を見に来る

と、女中の態度までががらり變るのも遣り切れない事であつた。

しかし均平との關係はそれきりにはならず、商賈を始めてから、その報告の氣持もあつて、或る日忘れて来た袱紗だとか、晴雨兼用の傘などを取りに行くと、均平はちやうど、風邪の氣味で臥つてゐたが、身邊が何だか寂しさうで、鬚髯がのび目も落ち窪んで、哀れに見えた。均平から見ると、宿酔ひでもあるか、銀子の顔色も好くなかつた。
「それは可かつた。何か好い相手が見つかるだらう。」

間味の積りでもなく均平は言つてゐた。

六

この邊は嚴しい此頃の統制で、普通の商店街よりも暗く、簾下げの十時過ぎともなるで、偶には聞える三味線や歌もはつたり遠んで、前に出てゐる薄暗い春日燈籠や門燈もスベツを切られ、町は防空演習の晩宛然の暗さとなり、十一時になると其の間際の一小時の慌忙しさに引換へ、アスファルトの上にはつたり人足も絶えて、偶に酔ばらひの紳士が彼方へよろよろ此方へよろよろ歩いて行くくらゐのもので、艶かしい花柳情緒などは棄にしたくもない。

廣い道路の前は、二千坪はかりの空地で、見番がそれを買ひ取るまでは、この花柳界が許可されるずつと前からの、可也大規模の印

刷工場があり、教科書が刷られてゐた。がつた人がつたんと單調で鈍重な機械の音が、朝から晩まで續き、夜の稼業に疲れて少時間の眠を取らうとする女達を困らせてゐたのは勿論、起きてゐるものゝ神經をも苛立たせ、頭腦を痺らせてしまふのであつた。しかし工場のある處へ、殆ど埋立地に等しい少し許りの土地を、數年かゝつて其處を地盤としてゐる有名な代議士の盡力で許可して貰ひ、かきさした間に合はせの普請で、兎に角三業地の草分が出来たのであつた。まだ形態が整はず、組織も出來ずに、日露戦争で飛躍した經濟界の發展や、都市の膨脹につれて、浮き揚がつて來たものだが、自身で箱をもつて出先をまはつたやうな元老も未だ残存してゐるから、下宿住みの均平がぶらぶら散歩の往歸りなどに、そこを通り抜けたこともあり、田舎育ちの青年の心に、御待合といふのが何のことか腑におちないがために、何か苦々しい感じであつた。その以前はそこは馬場で、菖蒲など咲いてゐたほど水づいてゐた。この附近に銘酒屋や矢場のあつたことは、均平もその頃薄々思ひ出せたのだが、彼も讀んだことのある一葉といふ小説家が晩年をそこに過ごし、銘酒屋を題材にして『濁り江』といふ抒情的な傑作を書いたのも、其から十年も前の日清戦争の少し後のことであつた。そんな銘酒屋のなかには、この創始時代の三業に加へたものもあり、空地のほとりにあつた荷

馬車屋の娘が俄作りの藝者になつたりした。この空地にあつた工場が、印刷術と機械の進歩につれて、新に外國から買入れた機械を据ゑつけるのに、この町中では、既に工場法が許さなくなつたので、新たに新市街に模範的な設備を用意して移轉を開始し、土地を開放したところで、永い間の悩みも解消され、半分は分譲し、半分は遊園地の設計をすることにして、餘り安くない値で買ひ取つたのであつた。日々に地が均され、瓦礫が掘出され、隅の方に國旗の棹が建てられ、樹木の蔭も深くなつて來た。こゝで幾度か出征兵士の壯行會が催され、英魂が迎へられ、焼夷彈の處置が練習され、防火の訓練が行はれた。夜そこに入つて、樹木の間から前面の屋竝を見ると、電燈の明るい二階座敷や、障子の蔭に見える客や藝者の影、箱をかついで通る箱丁、小刻みに歩いて行く女達の姿などが、芝居の舞臺や書齋のやうでもあれば、花道のやうでもあつた。

狭苦しい銀子の家も、二階の見晴しがよくなり、雨のふる春の日などは緑の髪に似た柳が煙り、残りの淺黄櫨が、行く春の哀愁を咬んであつた。この家も土地建ち初まりからのもので、坪數にしたら十三四坪のもので、古くなるにつれて色々の荷物が殖え、押入れも天井の棚も、ぎつしり詰つてゐた。均平の机も簞笥とけんどんの間へ押しこまれ、本箱も縁側で著物の入つてゐる幾つかの茶箱や、行李のなかに押込まれ、鼓や太鼓がその上に置かれたりした。勿論彼は大部分から机の必要がなくなつてゐた。古い友人に頼まれて、一ト夏漢文の校正をした時以來、ペンを手にすることも稀であつた。

銀子は家の前へ來ると、ちよつと立停つて暫く内の様子を窺つてゐた。留守に子供達が騒ぎ、喧嘩もするので、わざとさうして見るのであつた。

七

ちやうど最近披露目をした小軀の子が一人、それよりも眞實の年は二つも上だが、戸籍がずつと後れてゐるので、臺所を働いてゐる大軀の子に、お座敷の仕度をしてもらつてゐる處だつたが、それが切火に送られて出て行く段になつて、子供達は漸とお母さんが歸つて來たことに氣がついた。養女格の晴彌も、出てからもう五年にもなる君丸と云ふのが二人出てゐるだけで、後は皆な残つてをり、狭い六疊に白い首を揃へてゐた。早速銀子達の下駄を仕舞つたり、今送り出した子の不斷者を疊んだりするのは、今年十三になつた仕込で、子柄が好い方なので銀子も末を樂しみにしてゐた。

銀子はこの商賣に取著たての四五年といふもの、いつもけい庵に箆め玉ばかりされてゐた。少し柄のいゝので、手元の苦しいところを思ひ切つて契約してみると、二月三月も稼

いであるうちに、風邪が因で怪しい咳をするやうになり、寢汗をかいたりした。逞しい體格で、肉も豊かであり、皮膚は白い乳色をしてゐた。髪の毛が縮く瞳は白哲人のやうに蒼色で、鼻も口元も彫刻のやうにくつきりした深い線に刻まれてゐたが、大分溼潤があるの、醫者の勧めで親元へ還したこともあり、銀子自身が餘り商賣に馴れてゐないの、子供の見張や、藝事を仕込んでゐる積りで、烏森を初め二三ヶ所渡りあるいたと云ふ、二つ年上の女を、田村町から出稽古に来る、常盤津の師匠の口利きで抱へてみると、見てくれのよさとは反對に、頭がひどい左巻であつたりした。一年間も方々の病院をつれ歩いてみて、睫毛や眉毛を蝕んで行く皮膚病に悩まされたこともあり、子柄がわるい代りに病氣がないのが取柄だと思ふと、親がバタヤで質が悪く、絶えず金の無心で坐りこまれたりした。銀子も色々の世間を見て來て、時には暴力團や與太ものゝ座敷へも呼ばれ、娘や女を喰ひものにしてゐる吸血兒をも知つてゐたが、女ではやつぱり甘く見られがちで、つい二階にある均平に降りてもらふことになるのだつたが、均平も先の出方では、動もすると爲で遣られがちであつた。

「厭な商賣だな。」

均平がいふと銀子も、

「さうね、止ませうか。」

「否々、君はやつぱりこの商賣に取りついて

行くんだ。泥沼のなかに育つて來た人間は、泥沼のなかで生きて行くより外ないんだ。現に商賣が成り立つてゐる人もあるぢやないか。」
「それはさうなのよ。世話のやける抱へんかおくり自分の體で働いた方が餘程氣樂だといふんで、好い姐さんが抱へをおかないでやつてゐる人もあるし、桂庵に喰はれて一二年で見切りをつけてしまふ人もあるわ。かと思ふと抱へに當つて、のつけからとん／＼拍子で行く人も偶にはあるわ。」

詰り好いパトロンがついてゐない限り、商賣は小體に基礎工事から始めるより外なかつた。何の商賣もさうであるやうに、金のあるものは金を摺つてしまつてから漸と商賣が身につくのであつた。

兎に角銀子は、色々の人の遺口と、自身の苦い經驗から割出して抱へは總て仕込から仕上げることに方針を決めてしまひ、それが一人二人順調に行つたところから、親父の顔のひろい下町の場末へ手をまはして、見つかり次第、健康さへ良ければ、顔はそんなに好くなくとも取ることにした。

「あんなの何うするんだい。」

粒をそろへたいと思つてゐる均平が言ふと、銀子は、

「あれでも結構物になりますよ。」

と言つて、こんな子がと思ふやうなのが、すばらしく當つた例を二つ三つ擧げて見せた。

「だから是だけは水のなのよ。一年も出してみて、よんど駄目なら臺所働きにつかつてもいいし、藝者がなくなれば、あんなのでも結構時間過ぎくらゐには出るのよ。」

勿論見てくれがいゝから、出るとも限つてゐなかつた。いくら色や愛嬌を賣る藝でも、頭腦と意地のないのは、何年たつても浮ぶ瀬がなかつた。

へ

銀子は誰が何時に出て、誰が何處へ行つてゐるかを、黒板を見たり子供に聞いたりしてゐたが、するうちお前が又一人かゝつて來て、ちよつと顔や頭髮を直してから、支度に取りかゝつた。そして其が出て行くところを片付け多勢の手で夕飯の餉臺と共にお櫃や皿小鉢がこて／＼並べられ、べちやくちや塵りながら食事が始まつた。

この食事、彼女達の或者に取つては贅澤な饗宴であつた。それといふのも、銀子自身が人の家に奉公して、餘じ思ひをさせられ、たことが身にしみてゐるので、たとひ貧しいものでも、腹一杯食べさせることにしたからで、出先の料亭から上の抱へが、姐さんへといつて届けさせてくれる料理まで子供達の口には、少し何うかと思はれるやうなものでも、彼女は惜氣もなく「これ皆なで廻けておあがり」と、眞中へ押運くらゐにしてゐるので、來たての一ト月くらゐは顔が蒼くな

るくらゐ、餓鬼のやうに貪り食へる子も、さうがつ／＼しなくなるのであつた。子供によつては親元にゐた時は、缺食兒童であり、それが小松川とか四ッ木、砂村あたりの場末だと、辨當のない子には、學校で麵麴にバタもつけて當がつてくれるのであつたが、この界限の町中の學校ではさう云ふ配慮もなされてゐないといふて、最近出たばかりのお酌の一人などは、お晝になると家へ食べに行く振をして、空腹をかゝへてその邊をぶらついてゐたことも度々であり、又一人は幾日目に温かい飯に有りついて、その匂ひをかいだ時、宛然天國へ昇つたやうな思ひをするのであつた。この子は二人の小さい仕込みと同じ市川に家があるので、大抵兵營の殘飯で間に合ふことにしてゐたが、多勢の兄弟があり、お櫃の底を叩いて幼い妹に食べさせ、自身はほんの輕く一杯くらゐで我慢しなければならぬことも、何時もの例で、皆なで彼女達は彼女達なりの身のうへ話をしてゐるとき、ふとそれを言ひ出して互に共鳴し、目に涙をためながら、笑ひ崩れるのであつた。勿論銀子にだつて、それに類した経験がないことはなかつた。彼女は食ひしん坊の均平と、大抵一つ食卓で、食事をするのでつたが、時には子供達と一緒に、塗りの剥げた食卓の端に坐つて、茄子の與市漬などで、輕くお茶漬ですますことも多かつた。そして其の食べ方は、人の家の飯を食へてゐた時のやうに、默禱や合掌こ

そしないが、何うみても抱へてあつた時分からの氣習が失せず、子供達の騒々しきや晴れやかさの中で、どこかちんまりした物靜かさで、お饒舌をしたり傍見をししたりするやうな事もなかつた。

非常時も、この頃のやうに諸般の社會相が、統制の嚴しき細かさを生活の末梢にまで反映して、藝者屋も今迄の暢氣さではゐられなかつた。人員の統制が、頭腦のぼやけたものにはちよつと理解が出来ないくらゐだが、簿記臺のなかつた帳面の數も殖えてゐた。銀子の今迄の、抱へ一人一人の毎日々々の出先や玉數を記した幾冊かの帳面の外に、時々警察の調査があり、抱への分をよくするやうな建前から、規定の稼ぎ高の一分五分か二割を渡す外は、餘り親の要求に應じて、子供の負擔になるやうな借金をさせないことなどの配慮もあつて、子供自身と抱へ主とで、各々の欄に毎日の稼ぎ高を記入するなどの、係官の前へ出して見せるための、銘々の帳簿も幾冊かあつて、銀子はそれを煩さがる均平に一々頼む譯にも行かず、抱へ主の分を自身で明細に書入れるのであつた。勘定の亂次のないのは、大抵のこの稼業の女の金錢問題にふれたる習性から來てゐるのであつたが、わざと慌けてするを極めこんでゐるのも多かつた。

食事中、子供は留守中に起つたことを、一つ一つ思ひ出しては銀子に告げてゐたが、

「それからお母さん、砂糖壺を壊しました。濟みません。」

臺所働きの子が好い機會を見つけて言つた。

「それから三村さん處へお手紙が……。」

均平はこゝでの習慣になつてゐる「お父さん」を駄がるので、皆は苗字を呼ぶことにしてゐた。

山 莊

簿記臺のなかつた、手紙を取り出してみると、それは加世子から均平に宛てたもので、富士見の青嵐莊にてとしてあつた。涼しさうな文字で、暫く山など見たことのない均平の頭腦に直ぐあの邊の山の姿が浮んで來た。しかし開かない前に直ぐ胸が重苦しくなつて、厭な顔をしてちよつと其まゝ茶盆の隅において見たりした。いつも加世子のことが氣になつてゐるだけに、何うしてあの高原地へなぞ行つてゐるのかと、不安な衝動を感じた。暫くすると彼は袂から眼鏡を出して、披いて見た。そして讀んで見ると、歸還以來陸軍病院にずつとゐた長男の均一が、大分落著いて來たところからつい此の頃家に還され、最近更にこゝの療養所に來てゐると云ふことが解つたが、父親に逢ひたがつてゐるから、來られたら來てくれないかと、簡單に用事だけ

書いてあつた。

均一と均平の親子感情は、決して好い方とは言へなかつた。それは餘りしつくりも行つてゐなかつた。家附娘以上の妻の郁子との夫婦感情を、その儘移したやうなものであつたが、郁子が同じ病氣で死んで行つてから主柱が倒れたやうに家庭がこたつきはじめた時、均平の三村本家に對する影が薄くなり、存在が危くなると共に、彼も素直な感情で子供に對することが出来なくなり、子供達も心の寄り場を失つて、感傷的になりがちであつた。均一は學課も手につかず喫茶店やカフェで夜を更かし煙草や酒も飲むやうになつた。

泰一といふ郁子の兄で、三村家の相續者である均一の叔父が、彼を監視することになり、その家へ預けられたが、泰一自身均平とは反が合はなかつたので、均一の父への感情が和む筈もなかつた。それゆゑ出征した時も、入院中も均平はちよつと顔を合しただけで、お互に胸を披くやうな事はなかつた。均一は工科を卒業すると直ぐ市の都市課に入り、三月も出勤しないうちに、第一乙で徵召され、兵營生活一年ばかりで、出征したのだつたが、中學時代にも肋膜炎で、一年ばかり本家の別荘で靜養したこともあつた。

手紙を讀んだ均平の頭腦に、色々の取留な感情が往來した。早産後妻が病院で死んだこと、その頃から三村本家の人達の感情が遠に冷くなり、自分の氣持に憐れみといふものを

初めて経験したこと、郁子の印鑑は勿論、名義になつてゐる公債や、身につけてゐた金目の装身具など、誰がいつの間にもつて行つたのか、あら方なくなつてゐることも不愉快であつた。均平はそれを口にも出さなかつたが、物質に生きる人の心のさもしさが哀れまされたり、先輩の騎旋でうつかりそんな家庭に入つて來た自身が、厭はしく思へたりした。世話した先輩にも、何うして見やうもなかつたが、均平も醜い争ひはしなくなかつた。「何うしたんです。」

均平が黙つて俛いてゐるので、銀子はきいた。

「いや、均一が富士見へ行つてゐるさうで、己に逢ひたいさうだ。」

「餘程悪いのか知ら。」

「さあ。」

「孰れにしても、加世子さんからさう言つて來たのなら。」

「行つてあげなきあ……何なら私も行くわ。」

中央線は往つたことがないから、往つて見たいわ。」

「それでも可いね。」

「貴方が厭なら諏訪あたりで待つてゝもいゝわ。」

「それでも可いし、君も商賣があるから、一人で待つても可い。」

「さう。」

銀子にはこの親子の感情は不可解に思へ

た。三村家で二人を引取り、不安なく暮してゐる以上、その上の複雑な愛情とか憎悪とかいふやうな難しい人情は、無駄だときへ思へた。彼女はまた若かつた父や母に猫の子のやうに育てられて來た。親子の素直で素朴な親への愛情は、均平にも羨ましいほどだつた。

二

汽車が新緑の憂鬱な武藏野を離れて、漸く明るい山嶽地帯へ差しかつて來るにつれて、頭腦が爽かになり、自然に潤えてゐた均平の目を愉しましめたが、銀子も煩はしい商賣を暫し離れて、幾月ぶりかで自分に選つた感しであつた。少女達の特殊な道場にも似た、あの狭いところうようよしてゐる子供達の一人々々の特徴を呑み込み、萬事要領よく遣つて行くのも並大抵話の焼けることではなかつた。

均平もあの環境が自分に適したところとは思へず、この商賣にも好感はもてなかつたが、一ト頃の家庭の紛紜で心の痛手を負つた時、彼女のところへ遣つて來ると、別に甘い言葉で慰めることはしなくても、普通通商賣人の習性である懐のなかを探るやうなこともなく、腹の底に滓がないだけでも、爽かな風に吹かれてゐるやうな感じであつた。それにもつと進歩した新しい賣渡制度でも案出されるなら卒知らず兎に角一目で看通しがつき、統制の取れるやうな組織になつてゐるこの許